

お年玉から始めるお金の家庭教育

まもなく春節となります。保護者の皆さんは、子ども宛にもらったお年玉をどうしていますか？子どもにお金のことを聞かれたとき、保護者の皆さんはその問いに対してどのように答えていますか？

「お金」は大人にとっても非常にナイーブな話題です。しかしながら、「お金」は私たちにとって、生きていくうえで避けることのできないものでもあります。大事で難しいことだからこそ、子どもにもきちんとわかってほしい。今回は子どもが初めてお金と接する機会になることが多いお年玉について考えていきます。



お年玉の習慣は日本にもあります。元々はお金ではなく、お正月に歳神様へ祭る鏡餅を家の長老が家族や親戚に分けていたことが一番有力なお年玉の始まりだとされています。当時は餅が価値のあるものであったが、その後は高度経済成長により、お金が主流となったことに伴い、お年玉はお餅からお金に変わりました。同じ頃に、お年玉を贈る相手も家族や親戚から子どもに変わったとされています。今でも、お年寄りの中には、子どもの頃のお年玉は餅だったという方がいるそうです。

筆者は子どもが生まれた後に、子ども名義の銀行口座を作りました。子ども宛に頂いたお祝いやお年玉をすべて貯金にしようと思いましたが、正直に言うとお金も一部あります。しかし、幼稚園への入園以降は、冬休み前に園長先生からのお話で「子どものお年玉は親御さんが使ってしまうのではなく、貯金してあげてください。」と毎年聞いていたこともあり、入園以降はすべて貯金となりました。

昨年までは、筆者が子どもの代わりに銀行へ預けに行っていたのですが、子どもたちが徐々に数字やお金に興味も持ち始めたことから今年は一緒に銀行へ行き、実際に子どもたちにお金を預けてもらいました。



まずは、家でお年玉についてのお話をしました。子どもたちに、「このお年玉は誰からもらったんだっけ?」「どうしておじいちゃんおばあちゃんはお年玉をくれたのかな?」と聞きました。質問で聞くことによって、子どもは自分で考えようとするからです。

お年玉に入れる金額については各々の考えがあります。毎年同じ金額をくれる親戚もいれば、年齢の数に500円を掛けた金額と決めてくれる親戚もいます。お年玉の金額はその方なりの考えがあつての金額です。もし子どもに「どうしてそれぞれのお年玉の金額がちがうの?」と聞かれることがあれば、おうちの人から子どもに「金額が大きい方がいいとは限らないよ。みんな〇〇ちゃん(子どもの名前)のことを考えて入れてくれたんだよ。嬉しいね。ありがとうだね。」と伝えてもいいかもしれません。

決して、「〇〇おじちゃんが一番大きいお金を入れてくれたね」というようなことは言わないようにしましょう。子どもが、高いお金をくれた人がいい人、高価なものの方がいいものと思ってしまうのは子どもの教育にとっても良くありません。

お年玉のお話をした後に、銀行のお話をしました。「このたくさんのお金たち、どうしよう?」「どこに置いておいたらいいと思う?」ここでもまた質問です。そうすると、たいていの場合には「おもちゃ買う〜!」と返ってくるかもしれませ

ん。ここからの返答が大切になります。

全部貯めようと子どもに言っても、子どもにとってはまだ貯金の概念が分からず、自分のお金が無くなる、親に持って行かれてしまうと感じるかもしれません。その場合は、全部をおもちゃに使うのではなく、もらったお年玉の全体の1割は好きに使ってもらい、残りは貯金にするということを提案してみてもいいかもしれません。また、貯金はお金がなくなることではなく、使うときまで銀行にお預かりしてもらおうということ。この2点を子どもに伝えるといいでしょう。

筆者の場合は、子どもたちはまだ幼稚園生なので、その年齢でもわかるように「おうちに置いておくとお金が迷子になるかもしれないし、泥棒さんに持って行かれるかもしれないし、パパとママがお買い物に使ってしまうかもしれない。だから、〇〇ちゃんが中学生くらいになってお金について自分で考えて上手に使えるようになるまで銀行さんにお預かりしておいてもらおうね。」と言いました。

それから、子どもたちにそれぞれの通帳を渡して、銀行へ行きました。初めて見る通帳でしたが、しっかりと自分の名前が書かれてあったので「ぼくのだ〜！」と喜んでいました。

子ども用の通帳はかわいいデザインを選べることが多いです。自分名義の通帳ですと、自分の所有物である感覚も芽生えるので、子どもが小さいうちから子ども名義の通帳を作っておくことはお勧めです。

筆者たちは近所の郵便局へ行き、ATMの機械を子どもたち自身で操作してもらいました。通帳を入れ、お金を入れ、最後に出てきた通帳をもらう。家に帰ったあと、子どもと一緒に通帳を見ながら「機械に入れたお金の数字と通帳にある数字が同じだね！これならお金がいくらあるか忘れないね！」と言いました。また、これまでに預けた金額の数を子どもといっしょに見るのもいいでしょう。その際も「数字がどんどん大きくなっていくね！」「これくらいのお金で何ができるかな？」などとまたも質問形式で聞いてみるのもいいでしょう。「今は大きい電車のおもちゃが1個買えるくらいのお金かな。もっと大きいのを買いたいならもう少し貯金を頑張らないとかな。」など、コミュニケーションも楽しくなるはずです。



子どもにとっては通帳にお金がいくらたまったかという数値はすぐに忘れてしまうかもしれません。しかし、毎年おじいちゃんおばあちゃんからもらったお年玉をお父さんお母さんといっしょに銀行へ行ってお金を預けて貯金したという出来事についてはきっと思い出の一ページとして記憶にとどまるはずです。やがて、大きくなり、お金が必要となったとき、そのお金は自分の夢へ近づくための資金としてきっと役に立つことでしょう。

文 原田 捷子